幼児の教育　第95巻　第３号　平成８年３月１日（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

'96 3月号

家庭―保育所―幼稚園

8. 3. 14

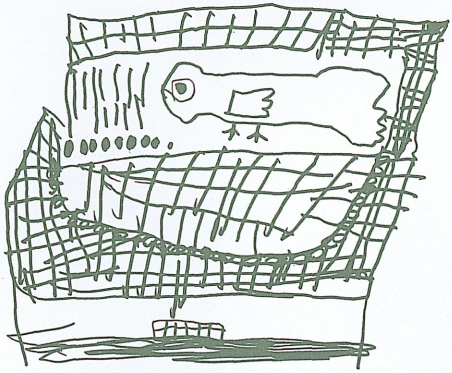
第95巻　第３号　日本幼稚園協会

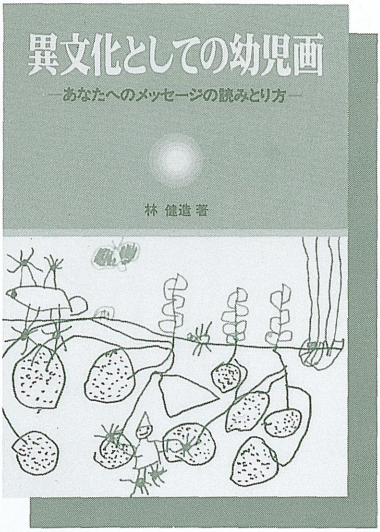
異文化としての幼児画

―あなたへのメッセージの読みとり方―

幼児の絵は特別の意味をもっています。それはあなたへのメッセージでもあります。幼児の表現を読み取ることが大切です。それを理解することによって適切な援助の仕方がわかってきます。

新刊





- 幼児の生きた造形表現がわかります。
- 発達による絵の読み取り方がわかります。
- 実際の造形表現の援助の仕方がわかります。
- 現職の園長としての保育譚(はなし)を楽しみながら保育の心が身についていきます。

林　健造・著

A５判・160頁・定価1,500円(本体1,456円)

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第95巻　第３号

幼児の教育　目次

——第九十五巻　第三号——

子供讃歌……（4）

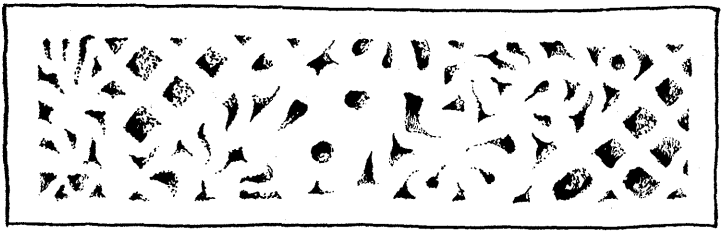
〈巻頭言〉三月によせて……清水　光子……（6）

世界の保育者たちの戦い……津守　真……（8）

遅れて来たおたまじゃくし
——雑誌『婦人と子ども』の中の楽譜——……伊吹山眞帆子……（12）

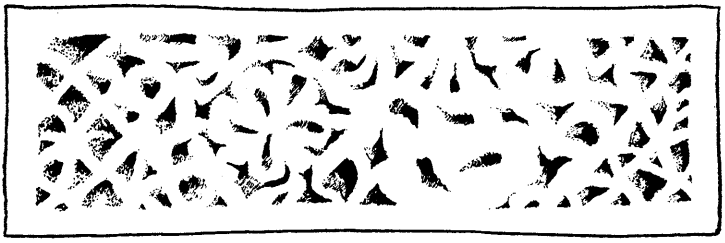
震災後の子どもたち(6)　地震よりこわいもの……森末　哲朗……（21）

© 1996
日本幼稚園協会



「こどもテレホン相談」から(2)
子育て、ひとりで背負わなくてもいいんだよ……小島　直美…（28）
お散歩、電車コースの巻……大須賀裕子…（36）
ある日の育児日記から(63)……佐藤　和代…（42）
動物行動の研究から(6)　卵の思い出……小山　幸子…（43）
四季の庭・四季の道　子どもと一緒に植物を見る眼……浅山　英一…（51）
ねえ、誰か教えてあげて　―おせっかいのすすめ―……永野むつみ…（59）

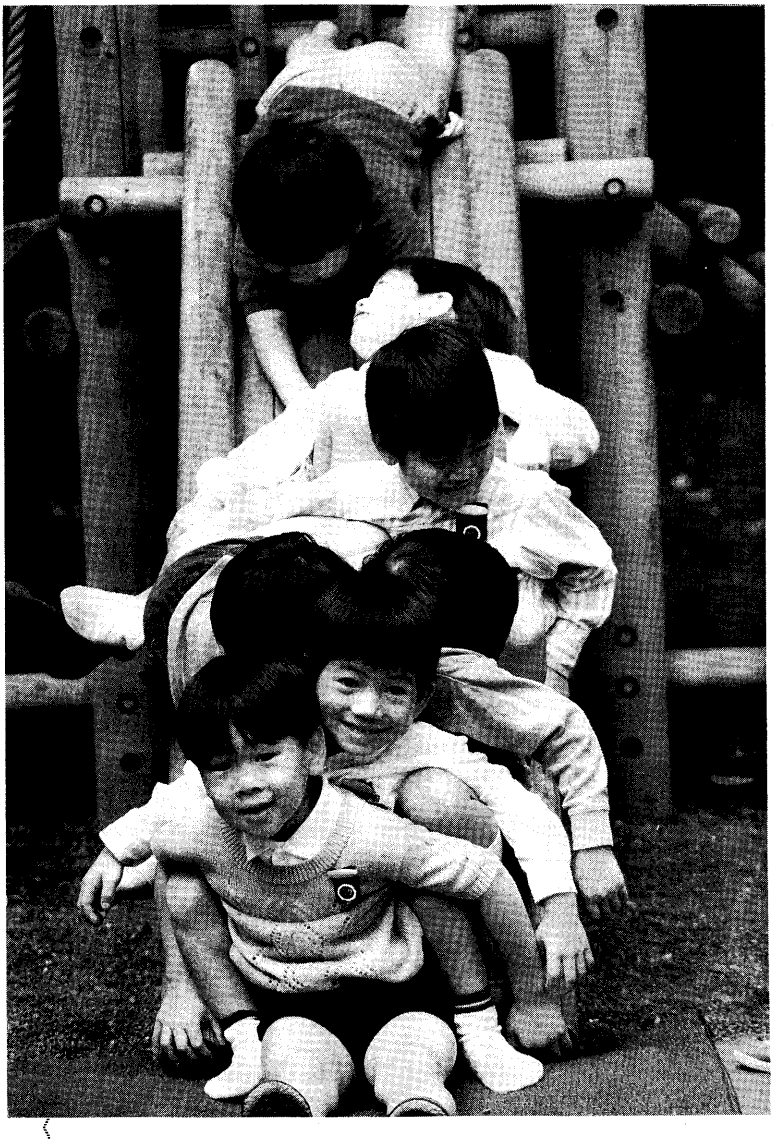
表紙絵・いわむらかずお（「なにかありそうだ」）
扉題字・津守　真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・彌永たたえ（松本旧市街散策）
編集委員・田代　和美／桝田　正子／伊集院理子
編集部・仲　明子



子供讃歌

外に出て遊ぼう

撮影・平野　清



〈巻頭言〉

三月によせて

清水　光子

「蝶々の行方ひろびろと霞かな」この俳句は倉橋惣三先生が昭和十六年三月、東京女高師（現お茶の水女子大学）の保育実習科という課程の卒業生に乞われるままに色紙にかかれた〝送ることば〟である。〝どこかで春が生まれてる……〟自然は着実にあらゆるいのちあるものを生かし、成長させはじめている三月。

古くから二月は逃げる、三月さわぐということばがある。公教育の場でもそう言えばそうね、と諾(うべ)なうような場面が多いように思う。

そんなことを考えながら、倉橋惣三先生の「育て

の心」の「三月」をあらためて読んで心に深くしみた。「芽が出ていましたと告げに来る子がある。花を見つけたといって飛んで来る子がある。つれられて行って見ると、その芽は低い雑木の枝の端の小さい緑粒であり……後略。」「『まだ、こんな小さいの……』またしても、こんなことをいうのがおとなだ。『まだ……』それは将来をのみ待って今を見落とす心、将来にのみ重きをおいて今を軽んずる心の、あさはかにも、すげない、つぶやきの声である。」「芽と蕾の今の春を『まだ……』としか受けとり得ない、」「欲ふかな、おとなの心である」。

三月の春は早く子どもらに来る。その中でその時々に、それぞれに享ける子どもらの小さい春を一ぱいに楽しませてやりたいものである。自然の中で、自然とともに。

なお、「育ての心」は自ら育つものを育たせようとする心である、教育は育つものに対する信仰であり、この信仰が与える光明によって子どもらとともに笑い、遊び（或るときは悲しみ心配して）生活できるのだ、との文章に深く感じいった。

北原白秋の童謡に（又しても蝶々であるが）蝶々蝶々三月二月霧雲はやい、ぬれぬれとべよ、からまつ山は、もう芽がのびる、大きくとべよ、霧雲さむい、気深くとべよ、とやさしいはげましをこめてうたってあるのを思い出す。

或る高名なエッセイストのことばに「人間は三歳までに一生分の親孝行をしていますよ、赤ちゃんの可愛らしさとはそういうものです。それ以上の期待を子どもにしちゃいけませんよ」とあって、なるほど！　と思ったことである。子どもたちの心の奥にある光るようなやさしさ、伸びようとする逞しいエネルギーをしっかり受けとめ、見守りながら、ともに三月を楽しみたいものである。

（音羽幼稚園）

世界の保育者たちの戦い

津守　真

世界の保育者たちが横浜でのＯＭＥＰ世界大会に集まったのは八月のはじめだった。開会式直前まであれほど朝も夜中も働きつづけていた私の家のファックスが、世界大会が終わったとたんに、ぴたりと活動をやめた。不思議なくらいに突然である。そこに集まった人たちは、いまはそれぞれの仕事の場で日常生活の楽しみと悩みと多忙さの中にある。

ＯＭＥＰ世界総裁ピノー女史は帰国されてすぐに、丁重な礼状の最後に、ファックスが必要でなくなって寂しいと記した手紙をくださり、それからひと月以上何の音沙汰もなかった。十月になって、久しぶりにピノー女史からのファックスには、帰国後すぐに風邪をひいて、めずらしく二週間もベッドの生活をしたこと、ケベックの秋は音楽会や美術展で賑やかなのに、どれにも行かれず残念だったことが記され、次のよ

うに書かれていた。「私たちは、人間性―それは子どもには自然に備わっていますが、大人たちが人為的に課した社会的、物的環境によって危機に瀕しています―を早くから守り（preserve）、励まし（encourage）、高め（enhance）ねばなりません。日本の世界大会はこの点で私たちを助けてくださいました」私の訳語が不十分であるが、初期に保護し守ったものは、それを保つためには励まさねばならず、更に文化的に高めていかねばならないという意味である。今回の世界大会のテーマだった「人間を育てる」ということは、こう考えると子どもから大人までの課題である。ピノー女史は世界のさまざまな国の人たちと、子どもの問題についての共通理解をつくるのにはどのような語で表現したらよいかを工夫しておられる。

そんなとき、ユーゴスラビアＯＭＥＰ委員長ミリアナ・ベジッキ女史から手紙を頂いた。日本に来て、世界各地のＯＭＥＰの友人たちと会うことができ、とくに、日本に友を得て嬉しかったと記され、また、「ＯＭＥＯデー」で講演することができた感謝のことばが述べられていた。「私たちは、これからも日本の保育者たちと交わりを一層ひろげ、ＯＭＥＰを通して協力したいと思います。来週は、セルビア各地からの教育者、心理学者たちの集まりがあるので、横浜の世界大会と日本の幼児教育のことを報告します（訪問した保育園のビデオも持っています）」と記されていた。ちょう

ど、新聞でユーゴ和平合意の記事が大きく報道され、相反する勢力であるセルビアとボスニアに言及されていたので、私は感慨深くこの手紙を読んだ。女史はその戦乱の地で、子どもたちが遊ぶ幼稚園をつくるのに尽力されている。

北アイルランドからの緊急報告をされたブリッド・ルディー女史は世界大会十日前になって、仕事の場をはなれられず来日できなくなったとファックスを送ってこられた。折角プログラムまで印刷したのに残念に思っていたが、直前になって来日が可能になった。八月一日、横浜のホテルに到着されたルディー女史は、そんな動乱の地から来られたとは思えない明るい表情の若い婦人だった。講演の内容は、その明るさとは逆に「過去二十五年間の紛争のゆえに北アイルランドの子どもたちは〝失われた世代〟になってしまったのか」との問いに始まり、この同じ時期の日本の子どもたちとはあまりにも対照的だった。「私の父は政府と警察によって絶えず投獄されていました。警察が私たちの小さな家のドアを蹴って入り、すべての物を滅茶苦茶にひっくりかえしました。私の学校のカバンは検査され、私は七歳で逮捕されました」。政治と宗教の葛藤により、ふたつのセクトに引き裂かれた環境の中で、彼女は分裂した両側の子どもたちが直接に接触する遊びの場をつくり、更にそれにとどまらず、青年たちが偏見と憎しみを自覚し、それを超えて対話する場をつくった。世界大会での彼女の話から察せられるように、彼女の仕事は前向きで明るい。平和への貢献により、彼女は

「ヨーロッパ婦人賞」を受賞した。ルディー女史は遠隔の地から日本まで来られながら、世界大会に出席されただけで直ちに帰国された。十一月になって、北アイルランドの民族紛争が和解に近づいていることを日本の新聞が報道したが、子どもたちの間を走り回るルディー女史の明るい笑顔がその一助になっているのだろうと想像した。

十一月にドイツOMEPのゲラー女史その他の方々が日本の教育視察に来られた。そのときの日本の印象として次のことを話された。「ドイツの子どもは七歳までは遊びとファンタジーの世界にいる。日本の子どもたちは忙しくて遊ぶ暇がないと皆が言う。子どもはいますぐにでも遊びたいのに、それではどうするかを日本の教育者や親たちは本気に考えていないように見える。自分たちはそれが理解できない。日本の子どもたちは遊ぶよりも勉強している。ドイツの子どもたちも勉強するが、自分が愛し、関心をもっていることに向かって勉強する。日本の子どもたちは学校のために勉強する」。実に率直な観察である。

世界の保育者たちは、皆それぞれに異なった社会の困難と取り組んで、子どもの幸せのために―人間を育てるために―戦っている。そのことは世界の保育者に共通である。私共もそれぞれ異なった場所で、同じ戦いをする者となりたい。

（愛育養護学校）

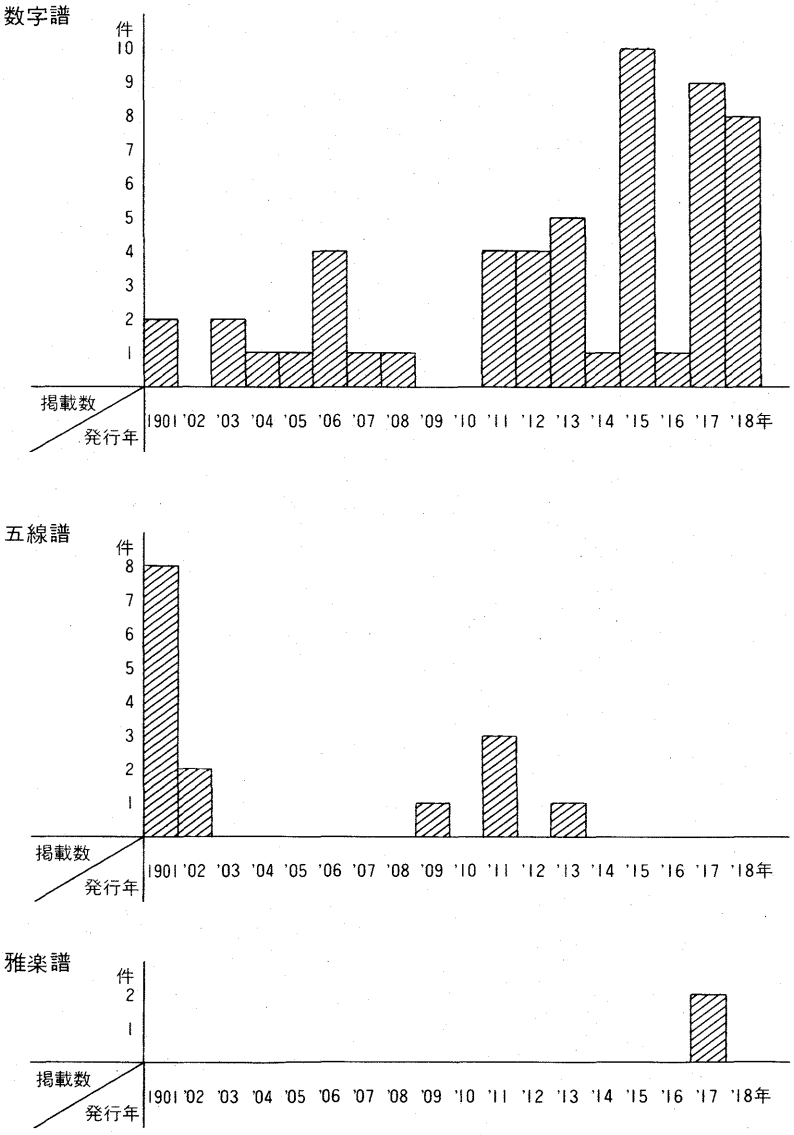
遅れて来たおたまじゃくし

――雑誌『婦人と子ども』の中の楽譜――

伊吹山眞帆子

『幼児の教育』の前身である『婦人と子ども』創刊号には、「各地に於ける婦人教育幼児保育の状態、婦人問題、婦人児童の遊戯、手毬歌、子守歌等に付きては詳細なる報告を望む」という広告が載っている。読者は身のまわりに報告したい歌や遊戯曲があったとしたら、どのように表わして寄稿しただろうか。音楽を可視的に書き表わす方法を記譜法と呼び、文字、数字、その他の記号や線を使った様々な記譜が存在する。たとえば、ネウマ譜、奏法譜、文字譜、譜線譜、箏・三味線・尺八・雅楽・声明・謡の記譜などである。『婦人と子ども』全十八巻（一九〇一年～一九一八年）には数字譜、五線譜それに雅楽譜の三種類の記譜法による楽譜が掲載されている。縦軸に楽譜の掲載数を、横軸に発行年をとると表1のようになる。各記譜法の内容を年を追って見ていくことにしよう。

表1　各記譜法による楽譜掲載数（年次別）



(一) 数字譜

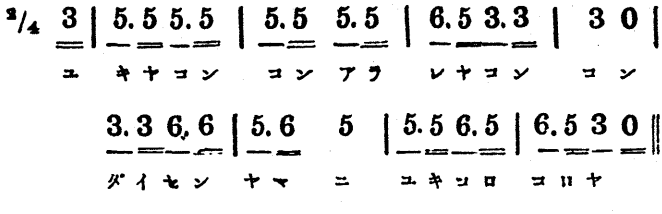
音楽教材を身辺の遊び歌から採集しようとする姿勢の窺える冒頭の広告に対して、全国各地からその地方に伝わる子守歌や遊び歌が寄せられた（表2）。楽譜で書かれているのは『鳥取の俗謡』（『婦人と子ども』第一巻三号、以下巻号のみ記す）『中の中の小佛』（第一巻六号）『新宮の七夕の歌』（第一巻七号）それに『東京の手鞠歌』（第五巻五号）の四曲で、すべて数字譜となっている（譜例1）。

また、幼稚園で実際に使用した曲『お月様と虫』（譜例2）以下十曲、京阪神連合保育会で使用した唱歌や遊戯曲『子どもと犬』（譜例3）以下二十九曲すべて数字譜で表わされている。

オースティン（Oesten, Theodor　一八一三～一八七〇　ドイツの作曲家）のピアノ曲『人形の夢と目覚め』でさえ数字譜に翻訳された形で載っている（譜例4）。

鳥取の俗謡

鳥取　永井幸次寄



▲譜例1　数字譜で載せられた俗謡（第1巻3号）

(二) 五線譜

第一巻および第二巻には多梅稚、吉田信太らの作品が十曲、五線譜で表記されている（譜例5）。これらは掲載の影絵遊びや物語、季節にふさわしいものとして選曲されたようである。しかし第三巻以降になると、五線譜による曲はほとんど載せられていない。かろうじて『幼稚園保姆合唱の歌』（第九巻四号）、フレーベル会夏期講習会使用の三曲（第十一巻八号）『ゴルドン美学講話』の中の譜例（第十三巻四号、七号）のみである。

表2　各地から寄せられた子守歌や遊び歌

盛　岡	お手玉歌 手毬歌 子守歌
武　蔵	俗謡
東　京	手鞠歌
上　総	羽つき歌・子守歌
相　模	手毬歌・子守歌
富士山麓	手毬歌・子守歌
越　後	俗謡
越　中	俗謡
加　賀	俗謡
信　濃	童謡・手毬歌
駿　河	子守歌
三　河	手毬歌
伊　勢	童謡
紀　州	七夕歌・手毬歌
浪　花	子守歌
豫　州	手毬歌
鳥　取	童謡・俗謡
備　後	手毬歌・子守歌

お月様と虫

ニ調　　久留島武彦

4/4　1 1 3 5 5 | 6 6・5 0 | 6 5 3 1 | 3 2 2 0 |

チツキサマ　マルク　オヤネヲ　デレバ
そのしばの　うらで　そのつゆ　すうて

1. 3 5 5 | 6. 5 i 0 ‖: i. 6 5 1 | 3. 2 1 0 :‖

クサバニ　ツユガ　キラキラ　ヒカル
かばいい　むしが　うたうよ　うたう

▲譜例２　幼稚園で実際に使用された曲の数字譜（第12巻11号）

子供と犬

ヘ調二拍子

| 1 1 2, 3 | 2 2 2 2 | 3 3 5 5 | 2 0 |

ボークノ　カハイー　コノジョン　ガ
おもたい　けれどー　おんぶした　ら

| 3 1 3 1 | 1 6 6 5 | 1 1 3 2 | 2 0 |

ワンワン　ワントー　アマエツ　ツ
すやすや　すやとー　おとなし　う

| 3 3, 3 | 3 5 3 2 | 1 2 1 1 | 5 0 |

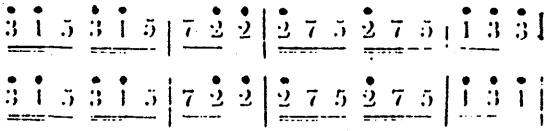
ボクノ　カラダニ　トビアガ　ル
ぼくの　おせなで　れんれし　た

| 6 6 6 | 1 1 1 1 | 3 1 6 5 | 1 0 |

ジョーンハ　ホントニ　カハイー　ナ
ジョーンば　ほんとに　かばいー　な

▲譜例３　京阪神連合保育会で使用された曲の数字譜（第13巻７号）

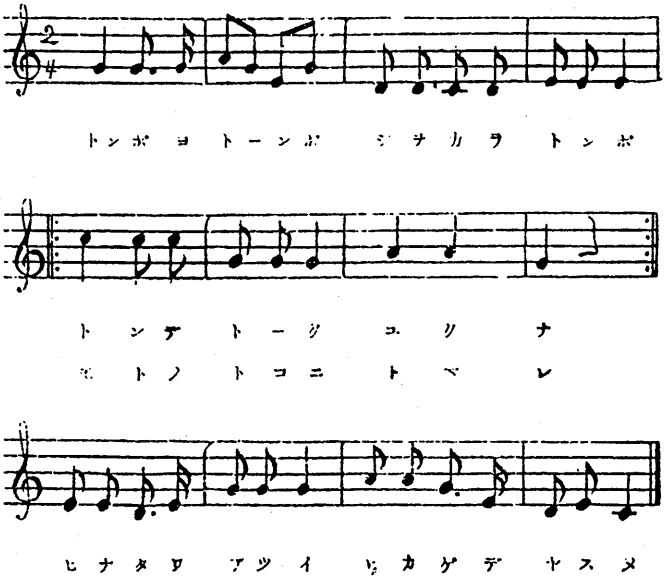
人形の夢と目覚め　遊戯曲『鳩捕へ』より



▲譜例 4　数字譜に翻訳されたピアノ曲（第18巻 8 号）

とんぼ

吉田信太作曲



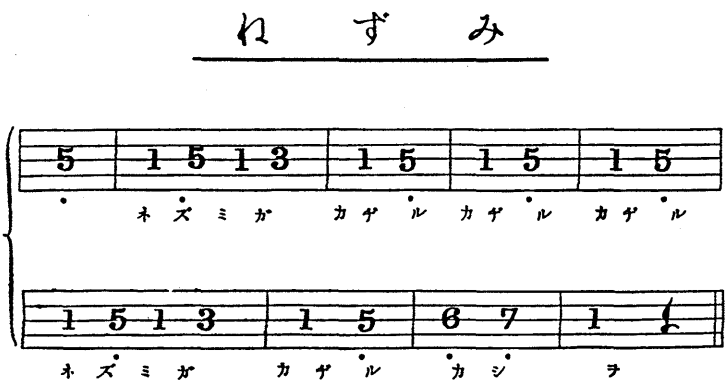
▲譜例 5　五線譜で表わされた数少ない例の一つ（第 1 巻 8 号）

ＪＡＳＲＡＣ　出9512448－501

風車

カーザーグールーマ。
徵。徵一 徵。角一 商。
カーゼーノ マーニー
商。角。徵。角。商。
ーマーニ。メーグールー
宮。宮一 商。商一 角。
思羽ノン
ーナーリ。ヤーマーズー
角一 徵。嬰羽。嬰羽。宮。
宮ノ
ーメーグールーモ。ヤー
嬰羽。宮。徵。角。商。
ーマーズ メーグールー
角。角一 徵。角。宮。
商ノン 勝羽ノ
ーモ。
宮。

▲譜例 6　雅楽譜で表された「風車」（第17巻10号）



▲譜例 7　五線譜と数字譜が併用された楽譜（第15巻10号）

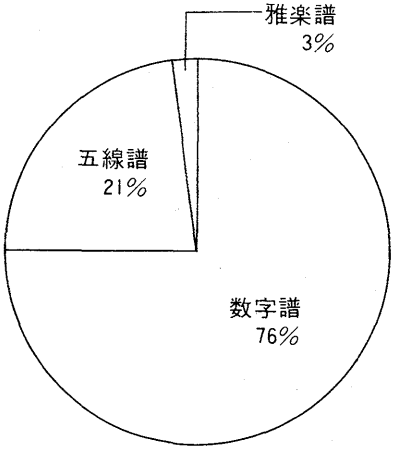
(三) 雅楽譜

『私立幼稚園の発達』という題の記事（第十七巻十号）の中に、芝麻布共立幼稚園の田中房子園長は明治二十年頃を回想して、雅楽譜による『風車』と『家鳩』を挙げている（譜例6）。明治九年、東京女子高等師範学校附属幼稚園開園に際し、式部寮伶人数名と附属幼稚園保姆たちで共同制作した『保育唱歌』からの二曲である。

『婦人と子ども』には以上述べた三種類の記譜法で楽譜が掲載されているが、主に数字譜と五線譜の二種で占められ、そして数字譜によるものの方が五線譜よりはるかに多い（表3）。

幼稚園での使用曲、保育集会で披露した遊戯曲、住んでいる土地の遊び歌、そういった音楽を紹介したいとき、記譜法として主に数字譜が採用されていた。特別な専門家でない限り、当時の人たちが曲を書き表わすときにはおおかた数字譜によったことがわかる。その頃の唱歌のような単旋律を表わすには数字譜で充分な場合が多かった。第十五巻には五線譜と数字譜を併用している楽譜も載っている（譜例7）。五線の存在を知っていて、音の長さの分割に

表3　各記譜法の割合



は五線の小節を使っても、音高を示すには音符ではなく数字の方を使っている。このようなジレンマがそれほど昔ではなく、たかだか八十年ほど前の保育者に見られた。オースティンの『人形の夢と目覚め』のように、西洋音楽を数字譜に置き換える必要があったことを示す例もある。

明治・大正の音楽文献には五線譜で書かれているものが多く、『幼稚園唱歌集』（文部省音楽取調掛編纂一八八七年）も滝廉太郎や山田耕筰の作品もそうであった。教科書や作曲家のレヴェルではそうだったのだろう。しかし、家庭や幼稚園では必ずしもそうではなかった。数字譜の方がコミュニケーションの手段として、また、唱歌や遊戯曲の記譜として優勢だったことを『婦人と子ども』の中の楽譜が示している。

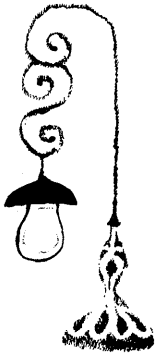
『婦人と子ども』の最終巻ともなると、数字譜から五線譜への移行を暗示する記事も見られる。『リズムについて』と題する記事や唱歌から独立した伴奏曲（前出オースティン作曲『人形の夢と目覚め』）の出現である。しかしそれらはかすかな徴候であって、記譜法にはまだ反映されていなかった。『婦人と子ども』を読む限り保育の現場ではおたまじゃくしはもっと遅れてやって来たのだった。

（お茶の水女子大学女性文化研究センター）

震災後の子どもたち(6)

地震よりこわいもの

森末　哲朗



十一月十三日付の地元紙によると、神戸市は阪神大震災による死亡者として、新たに百六十五人を追加認定したという。その結果、神戸市内の震災死者は四千四百八十四人にも上り、兵庫県内では六千二百四十九人にも上るという。すごい数だと改めて思う。

しかし、世界に眼を向けると、その十倍、百倍もの人たちが飢えや寒さや砲撃にさらされて死んでいっていることも事実だ。そしてこわいなと思うのは、そのことに対して割合とにぶい自分がいることだ。

旧ユーゴスラビアの中で、迫撃砲の砲弾が撃ちこまれる街の中で、コートの襟を立てて震えている老

人の映像がテレビ画面に映し出される。一瞬、地震のあった朝に、六甲の街角のあちこちで毛布を身体にまとい、放心したようにしゃがみこんでいた老人たちの姿を想い出す。でも本当のところはピンと来ていない自分がいる。しかし、もしも、自分の家族の誰かがサラエボに居て、毎日のように砲撃にさらされているとしたら、ぼくは間違いなくいてもたってもいられなくなるだろう。

あの一月の大地震についても似たようなことを感じる自分がいる。

どんぐりクラブ（六甲学童保育所）の建物は壊れてしまったけれど、そのためにいまだにテント暮らしが続いてはいるけれど、あの日の激震のために死んだりケガをしたりした子は一人もいなかった。ぼくの家族も建物は半壊になってしまったが、全員無事だった。

正直、「よかった」と思った。

亡くなった方には悪いが、自分の家族や友人やどんぐりの子どもたちが建物の下敷きになって圧しつぶされて死んでしまったとして、その時に感じるであろう悲しみと同じものを六千二百四十九人の人たちに感じてしまったらきっとその瞬間に発狂してしまうだろう。

名前も顔も知らない外国の人たちが、飢えや戦争のために死んでいるということと、自分にとってとても身近な誰かが死んでしまうということの間には大きな隔りがあるように思う。善いか悪いかは知らない。

いま、おとなのぼくがこんなことを考えている時、じゃあ子どもにとってはあの大地震はどう映ったのだろうという疑問が湧いてくる。同じ神戸で同じ時間を揺れにさらされながら過ごしたとはいえ、映り方が同じということはまずないだろう。子どもはおとなよりもずっとずっと具体的な生き物だ。行ったこともないヨーロッパの国の見知らぬ人の不幸など、まず考えることもないだろう。自分の親、

兄弟、親戚の誰か、どんぐりクラブの仲間、学校の友だち、あの駄菓子屋、いつも立ち読みしているあの本屋、それらが最大の関心事だろう。それらが無事とわかれば、へし折れた電柱、凹凸になった道路、くずれおちた家などのあの見るも無残な街の風景は、おとなのぼくが見るのとは少し違った見え方がされていたような気がしている。

ぼく自身が子どもの頃、大きな台風に襲われたことがある。

一晩中風のうなる音を聞き、おびえながら夜を過ごしたというのに、台風が過ぎ去ったあとの風景は妙に胸おどるものだった。

立ち木がなぎ倒されている。水田は川が氾濫して水びたしになっている。お百姓さんの嘆きを想像するにはあまりに幼かった。ただただ圧倒的な風の力のすごさに驚嘆するばかりだった。

漁師の人たちの心配などどこ吹く風で、わざわざ荒れ狂う海を見に出かけたこともある。

台風の中をどきどきしながら荒海を見に出かける子ども。そんなことはしないようにと心配するおとな。

この構図は幾百世代も昔から、子どもがいておとながいる限りは絶えることなく続いてきた関係ではないかと思われる。

神戸を襲った激震から二週間が経った二月一日、「臨時どんぐりクラブ」は再開された。

どんな顔をして子どもたちはやってくるだろうと心配していたが、大方の子どもは屈託がない。勿論、表面上の屈託のなさとは別のところで、身体に刻み込まれた恐怖心を隠し持ってはいるのだろうけれど。

「こんなん、落ちとった」

「こんなもんも、あったで」

まだ新品に近いぬいぐるみ、組み立て前の箱に入ったプラモデル、大好きな漫画本、おもちゃの鉄砲、ありとあらゆる物が拾い集められてくる。あの頃の街角といえば、所帯道具一式がそっくりそのま

ま荒ゴミとして、ゴミステーションにうず高く積み上げられていたものだ。

タンスと一緒に葉書の束が捨てられていて手にとってみると戦時中に使われた切手が貼られている。きっと大切な葉書だったのだろう。それがゴミの山の中に埋もれている。持主はどうしたのだろう。亡くなったのか、それとも家人の誰かが勝手に処分してしまったのだろうか。色々と想いを巡らせてみる。

荒ゴミという名前で片づけられてしまう物たちに哀惜の情を感じているぼくがいる。

だが子どもたちはもう少し現実的だったようだ。普段ならお金を出して買わねばならない物が、言い方は悪いかもしれないがタダで手に入るのだ。

「おい、あそこに行ったら、ええもんほかしとったで」

「どこ、どこ」

「どんぐりのそばの、自動販売機のところやんか」

「ああ、あそこな」

子どもたちの荒ゴミ参りは連日のように続いた。地震＝悲惨＝子どもたちは暗い顔＝だから励ましを、という風な援助など格別必要としない世界を、ぼくの周辺の子どもたちは持っていた。学校が機能していなかったから、毎日黒板とにらめっこしないでいいという解放感もあったのかもしれない。新聞などでは一日も早く学校が再開されることを望むという論調が活字として躍っていたが、子どもの本心は別のところにあったような気がしている。二月になり、三月になり、激震地とそうでない地域とのばらつきはあったが、閉鎖されていたクラスが再開し始めた頃、「やっと学校、始まったな」と子どもに語りかけたら「このままがええのに」という返事を返した子どもがいた。

ここまでは、当時の子どもたちのいわば「昼の顔」である。

陽が落ちて、あたりが闇に包まれると、おとなのぼくも正直言ってこわかった。

「最大余震が、一か月後の満月の夜に、再びやってくる」というような、ウソかホントかわからないような流言がそれはそれで妙に真実味を帯びて聞こえたことは事実だ。何百回も続いた余震の毎日の中で、一つ一つの揺れに身体がビクンと反応する。昼間は動きまわっているから、震度二や三では体感しないことの方が多いのだが、夜になるとかすかな揺れでも感知してしまうのだ。ストレスの解消と安眠のため、ぼくの酒量は飛躍的に増えたことを覚えている。

だが、子どもは酒に頼ることができない。

では何に頼るかといえば、家庭の中では親の存在なのだ。不気味な音をたてて余震が襲ってきても、そばに親がいれば手を握り合って恐怖に耐えることができる。このことの意味はとても大きい。真っ暗な闇の中で家具がカタカタと音をたてる時、子どものおびえといったらとても形容できるものではないだろう。でも、しがみつくことのできる親がいることで不安や恐怖の総てを委ねることができるのだ。

子どもにとって「地震よりこわいもの」がある。それは「地球が揺れること」ではなく「親たちが揺れること」だろうと思う。揺れ続けるプロセスそのものと、その結果としての離婚ではないかと思う。

物理的な力で「家屋」を崩壊させるのが地震だとするなら、精神的な力で「家庭」を崩壊させるのが離婚なのだろう。

地震は不意に訪れてくるが、離婚は不意には訪れてはこない。何か月も何年もかけて両親である男と女が揺れ続け、その終着駅としてぎりぎりの選択がやってくる。子どもはその長い長い時間を不安に包まれて過ごさねばならない。

どんぐりクラブで十四年間、子どもたちとその家庭と向き合ってきたが、単なる夫婦喧嘩を越える位

置に立ってしまった両親を持つ子に何度となく出会ってしまった。その子たちの表情は、余震の時に見せたおびえの表情よりももっと暗いものがあったように記憶している。ある子はチックのサインを示した。ある子は一日中唇のまわりを舌でなめまわしかさぶたになるほどひどかった。学校に行けなくなった子もいた。両親の言い争う声をふすま越しに聞かされ、学校どころではない気分になったようだ。

……ぼくは離婚というものを裁こうとは考えていない。一人の男と女が、もうこれ以上一つ屋根の下では暮らしていけないという壁にぶち当たることは、もしかするとすべての夫婦が抱えている問題なのかもしれないのだから。

だが子どもたち、特にぼくが毎日つき合っている小学生たちの年頃には、親が揺れている毎日はある意味では地震よりも酷なものがあるのではないかと、やはり思う。

（六甲学童保育所どんぐりクラブ指導員）

▲傾いた家、デコボコの道路。子どもたちは毎日毎日廃材を運んだ

廃材を運ぶ子どもたち

どんぐり便り第一号より

…前略…多くの避難者が暮らしている六甲小学校では、湯タンポを持ってきて「お湯を下さい」と言ってくる人、ポットを手にお茶を飲むためのお湯の必要な人、カップラーメンをもってきて「お湯も入れて」と言う人、様々な人がお湯を求めてやって来るコーナーがあります。学校の北側の一角にあってPTAの人たちが中心になって一日中ドラム缶の大型のようなカマドにマキを加え続けています。

どんぐりの子どもたちは、二月六日からこのコーナーの「材木調達役」を開始しました。

ノコギリ、ハンマーを手に長い柱を適当な長さに切ったり、クギだらけの平板をへし折ったり、子どもたちはよく働きました。多い日は午前二回、午後二回という感じで、昼食をはさんでほぼ一日中この作業にかかった日もあります。

車に満載になった廃材を、デコボコや地割れの目立つ道路を通って学校まで運ぶのも子どもたちがやってのけます。かなりの重量があるので、文字通り「ちからを合わせる」ということがないと、車は前に進みません。カジとりを誤ると道路脇に停めてある自動車にぶつかりそうになることもあります。

初めの頃は足なみが揃わずあっちへフラフラ、こっちへヨロヨロしていましたが、ほぼ毎日の仕事としてもう一カ月余りやってきた子どもたちですから、けっこう堂に入ったものです。「ぼうず、がんばっとんなァ」と、声をかけてくれるオッチャンもいます。

「ヨイショ、ウンショ」と車を押していく子どもたちの姿を見ていて、何とも言えない誇らしい気持ちが湧いている毎日です。

（'95・3・12　どんぐりクラブ発行）

「こどもテレホン相談」から(2)

子育て、ひとりで背負わなくてもいいんだよ

小島　直美

「こどもテレホン相談」にかかってくる相談の中から今回は乳幼児期のことを考えてみたいと思います。

初めての育児での不安を訴えてくる母親の相談がほとんどですが、子育て中の母親自身の人間関係の悩みや人生への悩みも語られます。育児は育自とも言われるように、子どもを生み育てていく過程で母親は何度か自分の価値観や生き方に向きあわされます。我が子とつきあっていく日々に自分の育てられた日々が重ねられ、もう一度自分を生きなおすとき、それをお手伝いするのが電話相談員の仕事です。

つぎに、そのいくつかの例を挙げてみました。

新米ママには先輩としてアドバイス

初めての妊娠は、母になる喜び、期待、責任、そ

して不安もいっぱいで、出産までの毎日を様々な思いで過ごします。

かぶとり剤を使ってしまったが大丈夫か、肩こりの低周波治療は胎児に影響ないか、温泉は？　飛行機は？　ストパー（ストレートパーマ）をかけたい、子宮底が低いと言われて心配。

病院の健診でお医者様とゆっくり話せていないのかな、近くに相談できる先輩ママやおばあちゃんがいないのかな、と不安気な妊婦の声を聞きながら思います。

そして出産、黄疸が消えない、シャックリがとまらない、目やにがでる、便が二日も出ない、フラッシュをたいて写真を撮ってしまったが、心配ないか、等々、いろいろな不安が訴えられます。

最近は実家に帰らず、若い両親がスタートから子育てを共働する姿が受話器の向こうに微笑ましく浮かんできます。一方、昼間はひとりで奮闘している母親も多くいます。私はそんな新米パパやママに、昔で言えば同居のおばあちゃん、近所のちょっとおせっかいなおばさんのように育児のヒントを伝えてあげられたらと思っています（もちろん相談者に信頼される関係作りが前提ですが）。赤ちゃんを育てている母親や父親がいろいろな意味で守られ支えられてこそ、赤ちゃんの健やかな成長が保障されると信じます。ちなみに、私も一時は専業主婦で三人の子育てを経験しました。現在長男は二十二歳、そろそろ〝おばあちゃん年齢〟です。子育て相談は自分の失敗談が多い分、私の得意分野と自負しているのですが……。

子育て、ひとりで背負わなくてもいいんだよ

生後三か月の女児の母親から　子どもをかわいがれない。毎日、きょうこそは殺しちゃおうかと思う。家を出たい、夫とも別れたい、孤児院に預けられる

か、そばで火のついたように泣き叫ぶ赤ちゃんの声がしている中での通話。せっぱつまったものを感じながら、まず母親の話を傾聴する。赤ちゃんを生む前までは、いいお母さんになろう、赤ちゃんをかわいがろう、赤ちゃんを死なせて捨てた親のニュースを聞き、何でそんなことをするのだろうと思っていた。この子は手がかかる。よく泣く。ミルクを飲まない。夜も一時間おきに起こす。このまま泣き続けて死んでくれればいい。直接手を下したことにはならないから。三か月で自分の心がこんなに変わってしまうなんて。

産後実家に帰ったが実母に歓迎されなかった。赤ん坊が泣くとうるさいと言われ気がねがあった。母乳は出ず、子宮の回復も遅くつらかった。二週間も居ないで自分のマンションに帰った。三か月になれば楽になると言われていたのにどんどん難しくなる。夫の協力も得られずひとりで大変な思いをし、とうとう限界に達した状況の訴えが続く。〝本当に大変だったね、つらかったね〟、と母親の気持を受けとめて話を聴いていくうちに母親の声のトーンが穏やかになってくる。三十分たつ頃、赤ちゃんも泣きやみ、母親の声がやわらかくなってくる。

この訴えの背景に、母親自身が実母にかわいがられず育ったこと、母親の実母と祖母の嫁姑争いが長かったこと、父親も実父母を幼少時に亡くし養父母に育てられたこと、父親の養父母と母親の実家との折りあいが悪く結婚式もあげずにやっかいばらいされたように結婚したこと等、夫婦それぞれに家族の大変さを乗り越えてこの赤ちゃんの親になったことが語られた。一方夫には未熟な面があり、母親としての妻を支えきれない。しかし自分の生い立ちからこの子には寂しい思いをさせたくないととてもかわいがっていることもわかる。

電話口で赤ちゃんの甘える声がしはじめ、母親が

それに甘くやさしい声で応える。〝本当はかわいい赤ちゃんだよね、ただ大変なことが重なって疲れちゃったのね、ひとりだけでがんばらないで皆に助けてもらっていいんだよ〟。保健所の三か月健診も近く、赤ちゃんがかかっている小児科の医師が母親を小さい時から診てくれていたことも安心と思われた。

本当に電話して良かった、と涙声で言ってくれた母親、七十分の電話でのつながりがきっと力になってくれたことを信じて受話器を置く。

日本でも最近児童虐待という言葉がよく聞かれるようになりました。以上の相談のように子どもがかわいく思えない、さらに虐待寸前です、今子どもを叱りつけて玄関から放り出してしまった、との訴えが電話相談にも増えてきました。赤ちゃんが育てにくい気質を持って生まれた場合、母親は本当に大変です。その母親を支える人がいることの大切さ、そして母親自身がしっかり愛された記憶を持てていることが子育てにとても大切だと痛感します。

たまにはお母さん自身の時間を持って

三歳三か月の男児の母親から　結婚して十年仕事を続けてから出産。子どもの要求につきあうのが大

変。つい〝ひとりで遊んで〟という思いで拒否してしまう。自分のペースがくずれてくると〝あんたのせいよ〟と当ってしまう。母親になる以前は縛られた経験はなかった。おとな同士のつきあいは相手の様子を見ながらのやりとりが普通なのに、子どもはこちらのことはおかまいなしにあれこれ言ってくる。私の言い分からすれば〝気にいらないこと〟の繰り返しが育児。夫は仕事が忙しく育児の手助けは期待できない。でも子どもとは週一度休日のみのつきあいだから何もかも許せる。かえって母親の叱り方が悪いと責める。

他人はそんなに大変なら保育園に預けて働けば、と言う。そう言われると逆に自分は今まで本当の意味で子どもをかわいがってきただろうか、と子どもを手放すことも不安になる。

責任感もあり、保育園に預けて自分が働くことの後ろめたさもあり、母子の悪循環をはらんだ密着がますます強まっていきそうです。この息子さんは最近テレビでけんかや争い事や親が子どもを叱る場面を見るのを嫌がるようになったとのこと。このままじゃいけないと強く思ったという母親の気づきを受けとめ、三年保育に向けての週二日のならし保育に行き始めたそうなので、〝そんな時は母親の、自分自身の時間として息抜きし、帰ってきたら笑顔で迎えられる余裕が持てるといいね〟と今できそうな事をアドバイスしました。今度イライラしたら小島さんがいてくれることを思い出します、と終わることができました。その後も時々電話があります。幼稚園に入園してお友だちもでき、元気に通園しています。

女性も男性と同じように能力を発揮して社会で活躍するようになりました。ところが〝母親〟になって仕事をやめ子育てに専念すると、納得したはずな

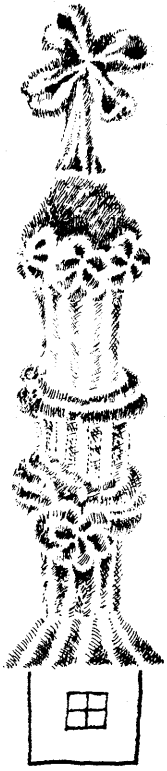
のに束縛感、不自由感に苦しめられる人もいるようです。自分自身の自己実現と母親であることを上手に折りあわせていくこともこれからの女性の課題のひとつだと思われます。

子育ての仲間ができると安心

母親が子どもを連れて外で遊ばせる頃の出来事もたくさんの訴えになって寄せられます。

公園に言っても親から離れられずに遊べない。他の子のおもちゃを取っちゃう、乱暴、逆にすぐ譲っちゃう。子どもはこれらの経験を経て友だちづきあいを学んでいくものです。母親たちが自分の子どもだけでなくどの子も同じに成長を見守っていけば特に問題はありません。ところが母親同士が良い友だち関係を持てないことがあまりに多い気がします。

二歳半の男児の母親から　おとなしいひとりっ子、公園に遊びに行くとぶたれたりつねられたりする。



おもちゃの取りあいとかでなく、本児そのものが暴力のターゲットになってしまう。相手は三歳の男児、下の子が生まれたこともあるがそれ以前から母親は公園には出てこない。この子の乱暴には他の母親たちもとても困っている。しかし本児ひとりがターゲットになってくると、皆我が子さえよければという態度がみえみえで、皆で解決していこうという気はない。むしろ「めそめそしてるからやられるのよォ」と言う。母親も地域の中で自分ひとりが浮いたら大変と、つい「あんたが弱々しいから……」と子どもを責めてしまった。今話していてまわりの母親たちの中で自分を見失っていたのに気づく。我が子の良い面を認めてあげてこの子が安心して遊べる友だちを探してみたい。

「まともな常識のある人と話せて良かった」と最後に言った言葉が印象的な相談でした。この相談からはいじめの芽も感じます。若い母親世代がすでに人と手を結びあうことより、人を競争相手として振りはらうことを身につけてきてしまったのでしょうか。

社宅での母親の人間関係の悩み、幼稚園の送迎バスの集合場所での母親同士のつきあいのむずかしさ、マンションで階下の人から子どもの足音や声がうるさいとの苦情を訴えられたとの相談。子どもを育てている母親をとりまく社会状況の厳しさも数多く寄せられます。そんな母親たちのストレスが子どもとの間にトラブルを起こす前に、小さくても緩衝地帯の役割が果せることを願っています。

「良い母親」からの解放

乳幼児期の子どもたちのことを電話相談の中からお話してみようと思い、四年間をふりかえってみたのですが、この時期はまさに子どもそのものより子

どもをかかえた母親がサポートされる時期だということがあらためて痛感されます。

もちろん二歳を過ぎると、言葉の遅れ、吃音、チック、トイレットトレーニングのトラブル、夜泣き、恐がり、性器いじり、自己主張が強い、等母親にとって〝困ったこと〟の相談も多く寄せられます。中には「どうしてもゴミを捨てられない」「異常な程のきれい好き」と神経症様的な相談もあります。これらの相談も母親の困っている様子をていねいに聴き、混乱している気持を受けとめ、状況を整理していくと、母親の方から問題解決の方向が語られることが多いのです。乱暴、噛みつく、爪かみ、後追い、落ちつきがないと二歳三か月の男児のことを相談してきた母親も、そういえば下の子が生まれた頃からめだってきた。お兄ちゃんだからしっかりさせなきゃとついつい要求水準が高くなってしまう、外に連れて出ることも減ったし、といろいろと気づき、赤ちゃんのように甘えたい気持もあるんですね、とさっそくグズグズと電話口に近づいてきた子を抱きあげて語ってくれました。

失敗やつまずきは誰にでもあります。気づいてよかったね、教科書どおりの良い母親じゃなくてあたり前、というメッセージが子育て中の母親に届いてくれたら、今度は母親が〝良い子〟の枷(かせ)から子どもを解放させてあげられると信じます。

以上電話相談を通じて〝子育て〟に関して考えてみました。皆様のまわりの若いお母さん方も似たような悩みをかかえているかしれません。子育てを母親だけの重荷にせず、まわりのおとなたち皆で健やかな成長を見守ってあげたいものです。

（神奈川県横須賀児童相談所電話相談員）

お散歩、電車コースの巻

大須賀　裕子

この秋、一歳児いちご組十三名の一番のお気に入りは、電車コースのお散歩です。思えば春の頃には、おぶいひもと乳母車が必要でしたが、秋には卒業して、みんなで歩いていけるようになりました。一歳児クラスの成長は本当に著しく、秋にはクラスの半分以上の子ども達が満二歳をむかえました。赤ちゃんから子どもへと成長していく子ども達の様子をご紹介します。

「電車、見に行こう！」と言うと、「オシッコデナイ」と頑張っていた子ども達もトイレに向います。お世話やきの女の子達は、帽子係です。帽子をかぶっていないお友達がいると、その子の帽子を持ってかぶるまでずーっとあとを追いかけています。保母も帽子を忘れていると、さっと見つけ

て「帽子ナイト、散歩イケナイヨ」とやさしく教えてくれるので、保母も帽子を忘れません。

階段を元気に降りていきます。みんな歩いて降りられるようになりましたが、時々思い出したように、腹這いで後向きにズリズリと降りていく様子が何ともユーモラスです。いざ、靴箱へ。みんな自分の靴がわかるようになりました。さっさと自分の靴を出してきて一人で履いて戸口で待っている子もいれば、自分の靴を持って事務所へ見せにいき、園長先生に「いい靴だね」と言ってもらうのを待っている子、お兄ちゃんのいるクラスへ見せにいく子、みんなに「クック、クック」と見せてまわる子……という具合に、たいへんにぎやかです。

電車コースは自動車も通る道なので、お友達と手をつないで歩きます。保育園の門のところで「お友達と手をつなぎましょう」と言うと、お世話焼きのA子ちゃんは真先にB男君と手をつなぎます。C子ちゃんも黙って大好きなD男君の手をしっかりとつなぎます。E男君は「Dチャン、Dチャン」と何度も名前を呼びながら、ようやく靴を履いていたD男君を見つけて手をつなぎ、「エヘヘ…」と顔を見合わせて笑います。どちらかというと女の子の方が積極的でしょうか。まだ、歩行が不安定な、F子ちゃんやG男君は保母の手をしっかりと握ってきます。とは言っても一歳児クラスの子ども達のこと、まだまだ手をつなぐよりも一人で歩きたい年齢なので、車の通らない安全な所は、できるだけ一人で歩くようにしていま

す。

さあ出発です。お天気の良い日のお散歩は本当に気持ちよく、♪歩こう歩こう…と自然に保母の口から歌がこぼれます。まずは、八百屋さんの前を通って、おじさんとおばさんに「おはようございます」「いってきまーす」とごあいさつします。すっかり顔見知りになったので、おじさんもおばさんも「おはよう、どこいくの」「元気だね」と必ず声をかけてくれます。子どもたちもそれぞれが「デンシャ」「デンデン」「レッドアロー」「デンシャ、ミニイクノ」とうれしそうにこたえます。これもお散歩の楽しみの一つです。

かどをまがった所で陽なたに丸まっている猫を見つけました。子ども達は大喜びで「ニャンニャン」と指を指して騒ぎます。H子ちゃんは「キャー」と歓声を上げるほどです。保母も同じ目線に立ってと思い、しゃがみこむと子ども達もチョコンとしゃがみこみます。そのうち、少しずつ猫に近づいて行く子ども達ですが、猫が立ち上がってこちらに歩きだしたとたん、「コワイヨー」と急いで戻って来てしまいました。ちょっぴり恐かったようです。

猫をじっくり見た後は、「ネコノウタ（犬のおまわりさん）ウタッテー」とI男君からリクエストが出ました。保母が歌いだすと、♪（まいごのまいごの）コネコチャン…という具合に部分部分ですが子ども達も一緒に歌います。保母が時々、歌詞を替えたりするとJ子ちゃんが「チガウデショウ」と知らせるので「ごめん、ごめん」とま

た歌い直したりします。子どもの名前を入れて歌うと、K男君は、「モウイッカイウタッテ、コンドハKチャンッテ、ウタッテ」という注文もあります。楽しい歌声が続きます。

しばらく行くと、まだまだ線路には遠い所ですが、L男君が「デンシャノオトガ、キコエルヨ」と言います。M男君もD男君も「キコエル、キコエル」と心がはずむようですが、A子ちゃんは「キコエナイ！」とはっきり言い返します。「キコエル」「キコエナイ」そんな口争いができるようになったかと思うと、保母はついうれしくなってしまいます。

途中のお家の軒下に、みかんの木が植えてあって、春にはアゲハの幼虫やさなぎを見つけることができました。それを覚えていて、必ずのぞき込んで、「イナイネ」と確認します。また、プランターに植えられた稲の成長も楽しみでした。保母が「これがお米よ」「これがご飯になるのよ」と話していたことを覚えていて、刈り取られた後を見つけると、「ゴハンナイネ」と話したりします。

突然、K男君が空を見上げて、「クモダヨ」と教えてくれました。「オッキイ（大きい）クモダネ」としばらく空を見上げます。「（あれは）ボクノ、クモダヨ」とK男君が言うので「じゃあ、隣の雲は誰のかな？」と聞くと、「オッキイノハ、オバアチャンノクモダヨ」「チッチャイノハ、オカアサンノダヨ」などと話しながら、風に流れていく雲を眺めます。他にも「アッ、スズ

メ」「カラス、オッキイネ」など、様々な発見が散歩の楽しみです。

いつも通る道がきまっているので、建築中の家が、少しずつ形付くのを見て、「オウチガ、オオキクナッタネ」「トントン、シテルネ」と、その変化に気付きます。同じ道を通っているから発見することが、いくつかあります。「ココデ、Lチャンガコロンダネ」とか「シロバイ、トオッタネ」等々、子ども達の記憶力には驚くことがあります。

そうこうしているうちに、ようやく目的地の電車の見える所まで着きました。あーよかった、レッドアローの時間に間に合って。みんなお気に入りの場所にチョコンとすわり、お行儀よく見ています。保母が立っていると「オーセンセイ、ココニスワッテ」とD男君流の電車の見方を教えてもらいます。電車が通るたびに、L男君は「キッロイ（黄色い）デンシャ」「アッオイ（青い）デンシャ」と知らせます。「オーイ」と思いっきり手を振るのはB男君とF子ちゃん。電車がプォーンと警笛を鳴らしたのでG男君はびっくりして保母に抱きついてきます。いよいよレッドアローが下りと上りでやって来ました。二台が続けて来るので、手を振るのも力が入ります。

楽しみはレッドアローの他にもあります。H子ちゃんは線路のわきのネコジャラシを採って来て、コチョコチョとみんなをくすぐるのが大好きです。また、オシロイバナがたくさんはえていて、花を摘んだり、種を採ったりします。保母が

種から白粉を採ると、A子ちゃんはそれが気に入って、来ると必ず「トッテ」と種を持ってきます。そして念入りに白粉を自分の頬につけるのです。きっとお家でのお母さんのお化粧の様子を思い浮かべているのでしょう。

たくさん遊んだ後は、後ろ髪を引かれる思いで帰ります。そろそろお腹も空いてきて、甘えたくなる時間です。道にすわりこんで〝歩かない〟と全身で表す子や、一人が転ぶとそれを真似してわざと転んだりします。そんな時はしばらく見守ったり、抱っこしたりおんぶしたりしながらも「あっ、あそこに面白いものがあるから行ってみよう」という具合に、犬や猫やすずめやヘリコプターに助けられて帰って来ます。

帰りも八百屋さんに寄って「タダイマー」とごあいさつ。「どこへ行ってきたの？」と聞かれると、「レッドアロー、ミテキタノ」と目を輝かせて答えます。〝レッドアロー〟の一言に様々なエピソードが込められているのです。「へえーずいぶん歩いてきたんだね」とほめられて、うれしそうに保育園に向います。

毎日見ていると、見逃してしまいそうな子ども達の成長ですが、日常の生活や遊びの中でたくさんのことを発見し、様々な思いを感じています。これからますますお友達とのかかわりもふえ、言葉で身体全体で、驚きや喜びを表してくれると思います。こうした子ども達の思いをしっかりと受けとめ、共感していきたいと思っています。

（豊島区立千早第二保育園）

ある日の育児日記から (63)

佐藤　和代

有は三歳。この頃、ようやく歌を歌うようになりました。圭は二歳頃からチューリップやちょうちょの歌など歌っていたのに、有はどうしちゃったの…と思っていたら、いきなり難しい歌を覚えてしまった。ウルトラマンの主題歌です。これを低めの声でうなるように歌うから、どうも子どもの歌という気がしない。かつてウイーン少年合唱団やらパリ木の十字架合唱団やら聴いて喜んでいた母としては、どうも納得がいかない！　ボーイソプラノにならないかなー、と夢見ていたのに。

と嘆いてみても始まらないので、有に聴かせようと子供の歌をかけてみるのですが、これがまた歌よりオーディオに興味を示してしまうのです。レーザーディスクなんてすぐ使いこなして、自分でかけています。大きなプレーヤーがウィーンなんて出てきて、いろいろな計器がちかちかして、まるでロボットを動かしているみたいなんでしょうね。どこまでも童謡やボーイソプラノには縁がなさそう。やれやれ。

そんな有が唯一歌える童謡は「犬のおまわりさん」。かわいくていいわねなんて思っていたら大間違い。この間、交番の前でいきなり歌い始めてしまいました。

「いっぬっのー……」　黙れ！

動物行動の研究から(6)

卵の思い出

小山　幸子

小さいころに住んでいた家には、比較的広い庭があった。庭には、祖母の趣味で、実のなる木々がたくさん植えられていた。梅、渋柿、甘柿、栗、ざくろ、ゆすら梅、そしてグミの木などがそれぞれ何本も、所狭しと植えられていた。私にとっての四季は、これらの木々に葉がでて花が咲き、やがて葉が色づき、実がつき、そして葉が落ちて家中で落ち葉掃きをするというような、庭の木々の変化を中心としてイメージづけられていた。栗拾いの楽しさも、柿取りの楽しさも、ぐみの木から実をつまみ取って食べる楽しさも、四季の変化とともに脳裏に染み込んでいる。渋柿を干し柿にしたり、焼酎につけたりする祖母の手元をじっと見守っていた小さいころの自分を、今も昨日のことのように思い出す。祖母は、それらの作業のひとつひとつを、ゆっくりと確信に満ちた手つきで進めていたものだった。

所狭しと植えられていた実のなる木々は、私にとってはジャングルでもあった。植え込みの奥へと

分け入って行き、塀の際に植えられていたぐみの木の所に行くと、子ども心には家からずいぶん離れた所に来た気になったものだ。小さいころには距離感がずいぶん違っていたのだろう。冒険気分でぐみの木まで行き、実をつまみ食いするのは、ちょっとした楽しみだった。

この庭の中に、非常に古くて壁板もすっかり黒ずんでしまった鶏小屋があった。かつて祖母は、戦時中の食料の足しにとニワトリを飼っていたらしかった。けれども、私の小さいころにはすでにまったく使われなくなっていて、空っぽのまま放置されていたのだ。この鶏小屋に、小学校のころ、祖母に頼んでニワトリを飼わせてもらったことがある。小学校二年のころだと思う。私にとっては、生まれてはじめての飼育経験だった。そして、今にして思えば、これは今も続いている動物とのつきあいの原点とも言える経験となっている気がする。

祖母は、十六羽のニワトリを、私のために買ってくれた。ペットにしては多い数だ。だから、私にとっても、この時のニワトリにはペットという感覚はなかった。ニワトリを飼育をし、時には卵を取りに行く。そして、最終的には食べる、という経験をしたのだった。

このニワトリたちの世話をするのは、とても楽しいことだった。ニワトリの餌は、何とも言えない良い匂いがしていて、その匂いを嗅ぐだけでもとても楽しかったし、中に混ぜ込む菜っぱを庭先においた古びた木のまな板の上できざむのは、幼稚園のころのままごと遊びのような感じで楽しかった。半円形の金属の板が先に直角についた棒を使って糞をかき寄せて糞掃除をするのさえ、糞がたくさんたまっていればいるほど大漁気分で心地良かった。けれども、何よりも私が好きだったのは、卵を取りに小屋の中に入っていく仕事だった。

鶏小屋の裏には扉があり、それを開けると、奥の方にはニワトリ用の産室があった。卵を取りに行く

のには、この鶏小屋の裏の扉を開けて中に入り、いちばん奥の産室のところまでそっと入って行かなければならなかった。鶏小屋の中は暗くて、ニワトリの匂いでいっぱいだった。裏の扉を開けると、餌の匂いとニワトリの匂いの混じり合った独特の強烈な匂いがワッと小屋から飛び出してくる感じがしたものだ。この匂いを、私はとても好きだった。胸一杯にその匂いを吸い込むようにして、わくわくしながらもそっとはいって行ったものだ。そして、いちばん奥の産室のところまで行くと、よくそこでニワトリが卵を抱いて座り込んでいた。しゃがみ込んで座っているニワトリを驚かさないように、そっと産室の扉を開け、ニワトリのおなかの下にゆっくりと手を入れていく。そうすると、そこにはニワトリの体温でほかほかに暖められた卵があった。この時の気持ちは、嬉しさ以外の何物でもない。あったー!!と、心の中で叫ぶと同時に、喜びが沸き上がってくる。一人で、ほくほくと顔をほころばせてしまう。卵をそっと握りしめ、親鳥を驚かさないようにゆっくりとおなかの下から卵を取り出す。そして、両手で卵を包み込むように持つと、卵があった嬉しさも手伝って、体中に卵の暖かさが広がり、自分がその暖かさに包まれていくような感じがしたものだった。卵は、本当はとても暖かいものだ。

何か特別のことがあると、このニワトリは我が家でのご馳走として料理もされた。そんな時の祖母は、これぞというニワトリを選ぶと、ニワトリの頸を持ち、急所を軽くひねるだけで瞬時にニワトリを安楽死させた。頸椎をはずずこの処置は、指をごく僅かに動かすだけで済んでしまうものなので、横で見ていても何をしたのかまったく目にもつかないほどだ。しかも、頸を持った瞬間に

はすでにニワトリはぐったりとしているほどに素早く、その速さにも目を見張ったものだ。そしてその後は、柿の干し方、等を教えてくれたのと同じように、ニワトリの処理の仕方や裁き方を祖母はゆっくりと説明しながら見せてくれた。

小さいころの思い出は、思いだし始めると、その時その時の驚きや喜びの感情といっしょに、後から後から湧き出るように浮かび上がってくる。記憶に残るその時々のできごとは、それぞれ皆、数分間のできごとだ。それが今も鮮烈に脳裏に焼き付いているのを考えると、小さいころの体験の影響の大きさをとても感じる。ほとんど、心理学や行動学の用語にもなっている「刷り込み」の現象のように、瞬時に刷り込まれてしまったような感じすらある。

一般的には、刷り込みの現象は、離巣性の動物（鳥類や哺乳動物で、誕生時からすでに比較的運動能力が備わっている類の動物を指す）において、誕生後早期に身の回りにいる動くものを追従対象として記憶する現象を指して言う。ただし、このような追従対象の学習現象においても、その後の研究では、さほど誕生後瞬時に学習されるのではなく、誕生後十三時間から十六時間ころに最も学習が進むことがわかってきている。半日以上も経ってからの方が学習が進みやすいのだ。学習には、学習に最適の時期が存在していることを、これは意味している。また、この現象は、学習することが遺伝的に組み込まれていることを示している。「遺伝的な学習」、というのはとても奇妙な現象だ。

離巣性の動物で、比較的短時間におこなわれる学習現象として発見されたために、いかにも速やかな語感のある「刷り込み」という名前がこの学習現象には付けられたわけだが、就巣性（誕生時には非常に未熟な状態で、親による全般的な保護管理が必要な類の動物を指す）の動物においてもこの現象は存在していると考えられる。現象の進展が離巣性の動物に比べてゆっくりだという違いがあるだけなので

はないかと思う。誕生時の状態が未熟な分だけ学習に適した状態に至るまでに時間がかかるのではないだろうか。誕生してから何週間、あるいは何か月後かになって、ようやく追従対象を学習するのが就巣性の動物と言えるだろう。恐らく、刷り込みの現象に限らず、離巣性の動物にしても、就巣性の動物にしても、ある物事を学習すること自体には時間はかからず、学習に適した状態になるまでの時間に現象による違いがあるのではないだろうか。

小さいころのニワトリの飼育、等のことを思い出していて思うのは、同じ家で育っていても兄にはまったくそのような思い出や感慨がない（だろう）ということだ。共通の環境に存在していても、何に感動し、何によってほとんど一生に渡るような影響を受けるかはまったく違っている。これは、まわりにあるたくさんの刺激の中で、影響を受ける刺激を自ら選択していることを意味している。つまり、自分では影響を受けたと思っていて、確かに経験したことの影響はあるには違いないが、それは自ら影響を受けようと待ちかまえていてつかみ取ったような影響なのだと言って良いだろう。「影響を受ける」ということばに内在する受動的な態勢よりもはるかに積極的な態勢がそこには含まれていると考えられる。恐らく、どのような環境の中に入っても類似した刺激に反応して、似たような影響を必ずや受けていたに違いない、と思う。そして、恐らく、それぞれの環境によって生ずる違いは、その刺激を提供した人物が、その刺激を提供しながら付加した言語的教示や行動、態度などの周辺的な側面なのではないかと思う。例えば、祖母が庭の木々やニワトリに対して何らかの作業をすれば、刺激としてそれを感受しようとする態勢が私にはあったのだろう。そして、様々な動作を祖母が私に示しながら話した言葉やその言葉の中に含まれる物の考え方は、動作自体が持っている刺激に付加されていっしょに学習されていると思う。類似した刺激が示されて、しかも、

違った付加刺激が加わっていれば、私の中には同じ刺激動作に対する違った考え方の体系が構築されることになる。つまり、どんな環境にあっても類似した刺激に反応して影響を受けたことと思われるが、それに付加されている付加刺激によってまったく違った考え方の体系が作られることは充分に可能なのだ。共通の環境にいても、どのような基本的刺激にそもそも反応するかには生得的な要因が関与し、感受した基本的刺激に付加されている細かい付加的刺激は、その基本的刺激を具体化させ、体系化させると考えることができるのではないだろうか。

こうして考えると、このような遺伝的な学習、すなわち何を学習するかが遺伝的に組み込まれているような学習とそれに付加されて学習されるものの関係は、以前に紹介した鳥のさえずりの学習のメカニズム（十一月号）にも類似した側面を持っていると思う。さえずり学習の型板仮説によれば、何を学習するかが遺伝的に決定されていて、学習にともなってその地域の方言が学習されるという。そして、この方言を学習しておくことがつがい形成に重要な役割を果たすと言われている。人間の場合の諸々の体験学習にこれを当てはめれば、人間の場合には様々な現象を「学習するべくして学習し」、それに伴って付加的に学習された中に含まれている考え方の体系は、あるいはその人の一生に渡ってその現象に関連したものの考え方として染み込んでしまうのかもしれない。後年、様々な人との出会いの中で感じることの多い考え方の類似や相違は、年少時にどのような付加的刺激を供給されたかによって構築された考え方の体系が人によって似ていたり違っているのを感じる現象ということになるのだろうか。もしそうだとすると、周知のように、それが仲間関係の形成や結婚相手の選択にも関係していることは、鳥の場合の方言学習の果たす役割と非常によく似ている、と思う。

小さかったころの庭の木々にまつわる思い出やニ

ワトリにまつわる思い出は、たしかに心の奥底のどこかに自分の自然観の土台とも言えるものとして今も残っているように思う。そして、ニワトリの飼育は、人と動物とのかかわりのひとつの側面を実体験したとても貴重なものだったと思う。普通ならば避けたり見せないようにするような作業まで見せてくれた祖母の姿勢には、現代ではあまり触れることのできないような動物とのかかわり方の一面を伝えようという意図が、もしかするとあったのかもしれない。

数年前まで何年間か、都内のある女子大学で動物の実験実習を頼まれたことがあった。毎年何十人かの女子学生に接して知ったのは、あまり動物を飼ったことのある人がいないことだった。最近は、住宅事情の問題も動物を飼育したことのない人を増加させるのに一役買っているので、仕方がないと言えば仕方がないことかもしれない。実験計画を立てて、動物を観察し、実験をするだけでなく、この実習では動物（ネズミが多い）の飼育も当然担当してもらった。また、実習の間には、たいてい一度はネズミの出産を目にすることが多かった。そして、最後には最終処置をしなければならない。この一連の過程は、その意味では、単に実験をするだけに留まらず、動物の命を、その始まりから終わりまで預かる過程だとも言える。この実習を通して、彼女たちの反応を見ていると、観察や実験のおもしろさ以外に、生命の誕生や死、そして生命を維持することに伴う責任の重さがかなり大きな体験となっているのを感じることがある。大学に通う年代に至っていると、個々の体験にどれだけの影響力があるかはわからないが、それぞれの場面に際して実習を指導する立

場から与える言語的教示や行動、態度がもしかすると瞬時にその人の一生にも残るものとなるかもしれないと考えると責任の重さを感じる。そして、このような教育の現場をわずか数年間ではあっても経験した中で思ったのは、まず、すべての人に等しい影響を与えることは不可能だろうということだ。どの人にも、何を得ようとするかという遺伝的な学習傾向があれば、どの人にも同じものを提供しても感受しようとするかどうかには差がある。ならば、可能な限り多様な刺激を提示して、各人が感受したと見られるものにそれぞれその都度なるべく適切な言語的教示を付加するのが理想的な教育となるのだろうか（この雑誌に私がそのようなことを書くのはとてもおこがましいのだが。門外漢の虚言と読み流して頂きたい）。この場合になるべく適切な言語的教示とはいったいどのような教示なのだろうと思う。各人の関心がさらに高まり、具体化するようなアドバイスという中性的なものに終始するべきか、あるいはそこにさらに個人の考え方をも盛り込んだようなものにまでしても良いのか。対象年齢が低ければ低いほど個人の考え方をも含めた教示は影響が大きいだろう。大学までに至れば、どこからが個人的な考え方なのかを明示して討論をすることもできるだろう。否、もっと早い年齢からもそれは可能なようにも思う。そして、そのような討論の経験を持つことが、人によって考え方が異なることをも知る機会になり、様々な考え方の中で自分の考え方をいかに位置づけるかを考える機会にもなると思う。と、ここまで考えると、これはとても大変なことなのではないか、教育とは何て難しいことなのだろう、と思ってしまうのだ。

（聖徳大学短期大学部）

四季の庭・四季の道

子どもと一緒に植物を見る眼

浅山　英一

日頃幼児の教育に御尽力されている皆様

何かと多岐にわたる部門のことですから御世話のかかることと存じます。今回、花や草木について数回筆を執ることになりましたが、子どもたちと一緒に見る植物はあまりにも多く、その呼び名も取扱いも千差万別です。一を知って十を知るのたとえもあることですから植物の区別や取扱いに見る眼をと願っております。

いつまでも残る印象

幼い頃に見た美しい草花や荘重な樹木の印象は幾十年経っても記憶に新しく蘇るばかりでなく、その子の一生に大きな影響を及ぼすこともあるのは確かです。

花壇のチューリップやキンギョソウを見たときの小さかった子どもは、大人になって同じ花壇を見るときはもうその視角も視野もかなりちがっているわ

けで、感受性の強い子どもと、ものごとにあまり動じなくなった大人とでは大きなちがいがあります。

子どもと一緒にものを見たり考えたりする時は、子どもと同じ状態でありたいものです。そして大人は長い間に得た豊かな見聞や知識を子どもたちに与えてやる責任もあることです。

植物と人生とは密接な関係がある以上、大人は植物の世界を知り自らも学んでおかねばなりません。

ちがいの判る勉強

植物にはたくさんの種類があるのでその一つ一つを見たり学んだりすることは一生かかってもできることではありませんが、似ているからといって同じものだとせず、似ていてもここがちがうのだという眼を持つことを学ぶのが自然科学に対する態度なのです。

街の花屋に立寄ったときや公園や野山を歩くときその機会を捉えて子どもたちと一緒に草と木のちがいや同じ草花でも種類や性質のちがいが判るように仕向けてやることは大切なことです。

植物の世界

火の球として宇宙にあった地球の表面が次第に冷えて、そこに水と空気ができたことで植物や動物が発生して今日の世界を作り出したわけですが、植物

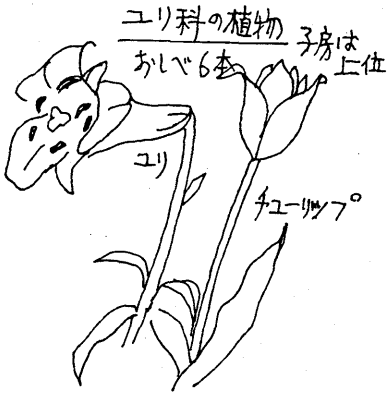
には大小さまざまの種類ができました。

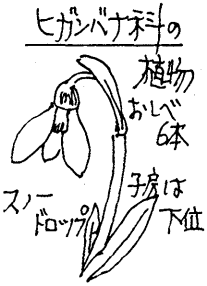
まず花が咲かないのはシダ類、コケ類、藻類、菌類、地衣類などの**隠花植物**ですが、とにかく花が咲く植物を**顕花植物**と呼んでいます。

顕花植物を通覧すると、たねとなる胚珠のある状態で二通りに区別することができます。

Ⅰ裸子植物　めしべには子房が無く胚珠が裸生しているもの　イチョウ、ソテツ、マツスギ、ヒノキ、モミなどの仲間

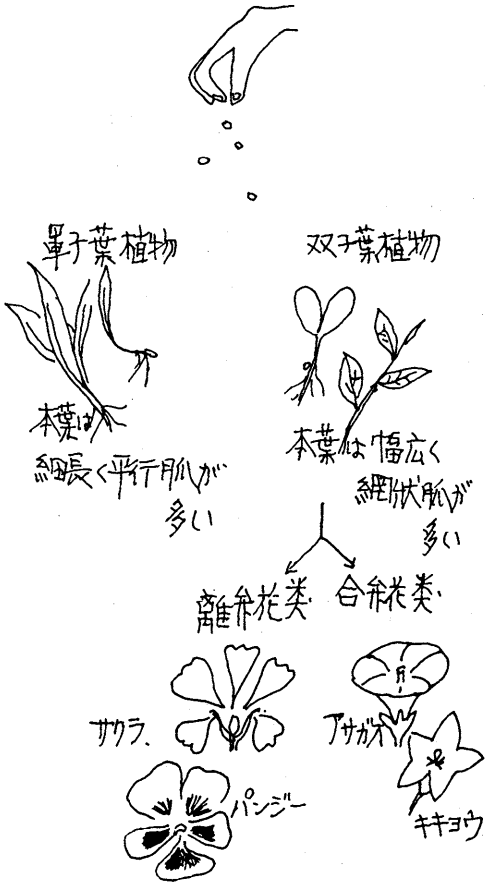
Ⅱ被子植物　めしべには子房があって中にたねとなる胚珠が内蔵されています。その胚珠の中にある子葉の数で次の二つに区別できます。





A単子葉類　たねの中に子葉が一枚ある植物　イネ、タケ、ヤシ、パイナップル、ユリ、ヒガンバナ、ヤマノイモ、サトイモ、アヤメ、ショウガ、ランなど　約四〇科

B双子葉類　たねの中に子葉が二枚（ふた葉）ある植物。圧倒的にこの類の植物は多くあり、これを花びらがバラバラにつくもの（離弁花類）と花びらが合着して筒、袋、壺、ラッパなどの形になるもの（合弁花類）とに区別できます。主なる科をとりあげてみます。



a離弁花類　ヤナギ、ニレ、クワ、アサ、タデ、アカザ、ヒユ、オシロイバナ、ナデシコ、スイレン、ハス、キンポウゲ、ナンテン、モクレン、ケシ、アブラナ、ベンケイソウ、バラ、マメ、カタバミ、ミカン、カエデ、ツリフネソウ、ブドウ、アオイ、ツバキ、スミレ、シュウカイドウ、サボテン、ジンチョウゲ、ザクロ、セリなど一二五科

b合弁花類　ツツジ、サクラソウ、カキノキ、モクセイ、リンドウ、キョウチクトウ、ヒルガオ、シソ、ナス、ゴマノハグサ、ノウゼンカズラ、ゴマ、イワタバコ、キツネノマゴ、アカネ、マツムシソウ、ウリ、キキョウ、キクなど四三科

科と属と種の名、学名

おおまかに似たものどうしの植物をナデシコ科とかヒルガオ科と分類しますが、さらにより似たものを属に分けます。ナデシコ科にはナデシコ属とかカスミソウ属、センノウ属など多数の属があり、その属をガンピとかセンノウとか種に分け、園芸的には花色や形のちがいで品種に分けます。

ある講習会でウリ科の植物をあげてみて下さいと言ったところ、キウリ、メロンまではまともでしたが、ナス、トマト、トウガラシなどが飛び出してきたので驚きました。ウリのつるにはナスビは成らぬという諺もあるのに全く区別を無視したことです。

子どもたちには〇〇科や〇〇属という判別は無理なことですが、種の別ぐらいは判ってほしいと思います。

和名と洋名と学名

どんな植物にも日本名（和名）はついているのですが、外国から渡来したものには往々その国の名（洋名）や学名のままよばれていることが多くなりました。

学名は世界共通の植物学上の呼び名で、これはギリシャ語やラテン語で属と種を並べてその名となっ

サクラソウ科の植物

ています。プリムラ・オブコニカとは、誰もよく知っている花の名ですが、たくさんあるプリムラ属のオブコニカ種ということです。

学名は片仮名ですが通用しない日本名より、反覆練習すればポインセチアとか、シクラメンという種名は子どもたちでも覚えてくれます。

草と木のちがい

植物には草と木があるのですが、草と木のちがいは一口で言えば茎や幹の組織がちがうのです。草はやわらかく木は内側が堅い材木になっています。それでは竹はと言えばこれは草の仲間です。

また、草は短命で、木は長命だとも言えます。いずれもたねから芽が出て育ったものですが、マツやスギの木は幾百年も生きていて江戸時代も明治時代も過して来たものも多くキンさんやギンさんどころではありません。そんな老木や大木を見たとき子どもたちは植物が人間以上に生きていることがわかる

と畏敬の念さえ感ずることでしょう。

サルやイヌが植物のたねをまいたり、植えたりすることはできません。植物を育てることのできるのは人間の特権です。昔から農業、林業、園芸という仕事があり、植物を育てそれを利用して文化をつくり出していることを幼い心に深く刻みこんでいきたいものです。

さて植物の世界を通覧して分類してみましたが、この基礎があってはじめて栽培することもおもしろくなってくるわけです。

栽培面から見た植物の種類

植物はたねからスタートして花が咲き、実が成る、このことを実際に行う仕事もいろいろです。

たねまき、植えかえ、鉢植え、地植え、剪定、整枝、繁殖、利用など農業や園芸の仕事をするには植物の性質を一応知っておくことが必要です。

一年草

たねが発芽してから、花が咲き、実を結んでまたたねができ一年以内に枯れてしまう草本類のこと。栽培法によって次のように分けます。

春まき一年草　原産地が熱帯地方ですから春に地温が高くなってからたねをまいて育てますが、長日期間には育つだけで、花は咲きませんが日が短くなってくると花が咲く性質（短日性植物）があります。　ヒマワリ、コスモス、アサガオ、マツバボタン、ケイトウ、オジギソウ、ハゲイトウ、フウセンカズラなど。

秋まき一年草　温帯地方原産の種類が多く秋に涼しくなってからまき、冬を越して春に日が長くなってくると花が咲く長日性植物です。　ヤグルマギク、カスミソウ、ヒナゲシ、ストック、スィートピー、ワスレナグサ、パンジー、ナデシコなど。

二年草

たねが発芽してから一年以上経ってから花が咲い

たあとたねができると二年以内に枯れてしまう草本植物をいいます。　タチアオイ、フウリンソウ、ルナリヤ、ジキタリス、マツヨイグサなど。

二年草は春六月いっぱいにたねをまかないと次年に花が咲きません。

多年草（宿根草ともいう）

花が咲いたあと、地上部は枯れても地中に残った株が次年に再び育って幾年も育つ草本植物のことです。　キク、キキョウ、ホオズキ、オイランソウ、フクジュソウ、シャクヤク、アヤメ類など。

たねをとってまいても殖やせますが、親植物と同じものを殖やすには株分けやさし芽で殖やします。

球根植物

地下にイモや球根のできる多年草を球根植物と呼びますがこれもその性質によって春植え球根と秋植え球根とに分けます。

春植え球根　グラジオラス、ダリア、カンナなどは高温植物ですからふつう四―五月霜が降りなくなってから植えつけます。

秋植え球根　アイリス、チューリップ、ヒヤシンス、アネモネなどは十月涼しくなってから植えつけると翌年の春に咲くようになります。

樹木類（花木類ともいう）

大きく分けて落葉樹と常緑樹に分けます。

落葉樹　サクラ、ウメ、ボケ、バラ、ボタンなどは晩秋から冬の間に植えつけます。

常緑樹　アセビ、ツバキ、サザンカ、アオキなどは、春芽の出ないうちに植えつけます。

どちらもたねをまいて（実生）殖やせますが親木と同じものを殖やすにはさし木、つぎ木などの方法によります。

熱帯植物にも草花と樹木がありますが寒さには弱いので鉢植えにして冬は室内にとりこむか温室やフレームに入れて保護します。

いわゆる観葉植物もあり、草と木は別です。

（園芸研究家）

ねえ、誰か教えてあげて

――おせっかいのすすめ――

永野　むつみ

お招きがあればどこへでもでかける劇団だから、長距離列車に乗ることが多い。本を読んだり、手紙を書いたり、居眠りをしたりと列車の中は私の書斎だ。けっこう気に入っている。しかしこのところ席をとるのに煙をとるか、〝子ども〟をとるかと悩む。タバコを吸わない私は、一車輛(はこ)分まるまると紫煙に包まれた席は乗り物酔いを誘い、居眠りもままならない。かといって禁煙車は、とくに休日前後に乗る場合はちょっとした覚悟が必要だ。とにかく子どもがいるとうるさい。泣く、騒ぐ、声高に話す(これは子どもに限らないが)、車内を走り回る。親は、と見るとたいてい同行者と熱心に語り合っているか、ぐっすりお休みになっている。これに腹が立つ。毎日の子育てで疲れているんだろうなあという思いも一瞬よぎるが、こっちだって眠りたいのにという悔しさが腹立ちに拍車をかける。車内を走り

回る子どもを呼び止めて「走らないでね」程度の注意は私にでもできるが、それ以上はむずかしい。なぜならこれは、子どもというよりおとなの問題だと考えるから。

先日も新幹線の中でこんなことがあった。

私の後ろに座った四、五歳の男の子が足のせ台をバタンバタンと起こしたり倒したりして遊んでいた。しばらくしたらあきるだろうとがまんをしていたがなかなか止まない。その度に私の座席もゆれる。頭の下のカバーもいじり始めたので「止めようね」と声をかけた。一度、二度。それでも止める様子がないので少し声を荒らげて「止めようね」と私。「〇〇ちゃん、止めなさい」ようやく男の子の隣に座っていた母親がたしなめた。並んで座っている子どもに注意するにしては思いがけず大きな声で、周囲の視線がむしろ私に集まったように感じられて気恥かしい気がした。しばらくして男の子はガラス窓をたたき始めた。あきると通路へ出てウロウロし、自動ドアを開けたり閉めたり。しだいにスピードも出て走り回るという様子。何人かのおとなに不快な表情が生まれた。「危ない、転ぶよ」言葉と手をかけるおばさんも一人、二人。時おり母親が思いついたように「〇〇ちゃん、じっとしていなさあい」とか「〇〇ちゃあん、座りなさあい」と座ったままで、首だけ動かして大声で言う。周囲のほとんどの人が目覚めてしまったよう。母親の声の方がよほど騒々しい。本気で座らせたいのならそばまで近寄って行き、男の子に聞こえるだけの声の量で注意すればいいのだし、連れ戻せばいい。私はじりじりする。案の定、男の子には母親の言葉が届いているとは言いがたい。落ち着いて座る様子は一向になかった。ついに私の隣の紳士が「静かにしろ」と怒鳴った。その声は男の子と母親と、なぜか私にも向

けられたような気がした。すると母親が突然立ち上がって、「パパ、〇〇ちゃんがうるさいの」とまた大声。あら父親もいたんだと思ったとたん、少し離れた席から立った男性が男の子の腕を引っぱって来て、私たちの座席のまえに立たせた。「〇〇、ゴメンナサイってあやまれ」と怒鳴り、頭をゲンコでなぐった。男の子はワッと泣き出した。隣の紳士は、と見ると眠ったふりをしている。「あ・あ・そんな……」とあわてる私。「ゴメンナサイって言えって言ってんだろ」とまた一発。かわいそうな男の子。「大丈夫、もう静かにできるよね、ね」となぐさめるしかない。私が言い出さなければ少なくともぶたれずには済んだのかしら。どうしてこんなことに……。

父親によって力づくで自分の席へ押し込まれた男の子にくだんの母親が、「アンタのせいよ。ああ恥かしい」と一言。

子ども、とりわけ幼児にとって、長距離列車での移動は必ずしも快適ではない。開かない窓、おとな用の座席、何時間もおとなしくしていろというのは土台無理な注文だ。じっとしていられないところに子どもの子どもらしさがあり、育ちへのエネルギーがかくされている。じっとしていられる子どもがいたらかえって心配だ。この〝あたり前のこと〟から出発したい。本を読むとか、あやとりをするとか、人形で遊ぶとか、しりとり、なぞなぞ、盤ゲーム、カード、折り紙、お絵描き、お話などなど、子どもの退屈をまぎらすための工夫と準備が欲しい。何の準備もしないまま乗り込んで子どもに静かにしていろ

なんていうのはほとんどいじめに近い。おとなとしての知恵が求められているのだ。幸いなことにおとなも昔は子どもだったのだから、少しは思いつくはず。枯渇してしまっているのなら、それこそ子どもと相談すればいい。列車の中で何をして遊ぼうか、狭い座席でどんなことならできるのか。車内には疲れていて眠りたい人もいるだろうし気分の悪い人もいるかも知れない。もしかすると自分と同じ様に退屈している人、大切な人が病気になってそのお見舞いに行く途中の人もいるかも知れない。列車の中にはいろんな人がいるのだ。その人たちにも少し思いをはせて、でも一方的にがまんを強いるのではない。自分も楽しくて、そして周囲の人にもできるだけ迷惑にならないようなすごし方はないかと考える。どんなおもちゃを持って行こうかと考える。子どもにとっては自分自身のことだもの、一所懸命考えたらいい。ものを考えるとはこういうことだと私は思う。少しおおげさかも知れないが、おもちゃを自分で選ばせることは子どもを〝ただ連れて行かれる人〟から旅行の主体者にする一歩にもなるのではないか。

ただ乳幼児の場合は、もちろんこうはいかない。第一、相談などということ自体が成り立たないだろうし、〝泣く子と地頭にはかてない〟のだから。赤ちゃんが泣いたらとにかく抱き上げてあやそう。それでも泣き止まなかったらちょっと歩いて、デッキに出て気分を変えてやる。この空間なら歌も歌ってやれる。「泣くのは止めなさい」「他の人にご迷惑でしょ」、くれぐれも交通違反をとがめるおまわりさんの様なポーズで赤ちゃんを説得しようとするのは止めて欲しい。声かけより抱きとめること、説得よりだまし、あやしが必要だ。彼らはそれを求めて泣いている。そのことに気がつかない親がこのところ

増えている気がしてならない。実はかく言う私も長男を育てているときはその気のある母親だった。言葉で子どもを育てていたような気がする。相手が〝赤ちゃん〟なのだということをうっかり忘れている。初めての子どもの場合、彼が一歳ということは親の方も、親になって一年ということ。やることなすことが生まれて初めてのこと。だから、失敗も勘違いも命にかかわらない限りやむを得ないと言うしかない。それでもなんとか無事に子どもが育つのはどの親も、決してひとりでは子育てをしていないということだろう。影響しあい支えあい、親として育ち合っている。私はこのことがとても大切なことだと今、やっぱり思う。

このあいだ、私の人形劇団の上演中に赤ちゃんがぐずり出した。なかなか泣き止まない。外へいったん連れ出せばいいのになァと、演技の途中、途中で思う。どうも子育て中の親は、我が子の泣き声に鈍感になるらしい。だからこそ子育てができるとも言えるが。誰か忠告してあげればいいのに……、やるせない気分がつのってくる。すると突然、プーア、プーア。その母親は音の出るおもちゃで赤ちゃんをあやし始めてしまった。アチャア。

ねえ、お願い。それはイケナイコトだと、誰か教えてあげて！

（人形劇団ひぽぽたあむ）

編集後記

『「こどもテレホン相談」から』の連載が一月号から始まりました。今月号からは園内外の四季折々の花や草木についての浅山先生の連載が始まります。今回はそのための基本的なオリエンテーションです。

＊

最近、ストレス解消に気功・太極拳なるものを始めた。ゆっくりと意識しながら呼吸をしていると、かつてこんな風に意識して呼吸をしたことがあったと思い出された。子どもがもっと幼かったときの寝かしつけの場面だ。あれこれ工夫してもなかなか寝つかないのが、ある時、子どもの呼吸にシンクロさせて横でゆっくりと呼吸をしていたら、何ともすんなりと寝てくれた。すごい方法を見つけたと喜んでいたのだった（ただし自分も一緒に寝てしまう確率が高いのが難点！）。今思えば、自分はイライラと速い呼吸をしながら、幼い子どもだけに眠るというゆっくり呼吸する状態を求めていたのは私の想像力の欠如を表している。

早く寝ついてほしいというのは多分に大人の都合であって、教育的ではないのだが、たとえ教育的であっても、思いや願いを子どもだけに押し付けていることってたくさんあるんだろうな。人の身になる・想像する力が自分を含めて大人に欠けている。今月の記事を読んでいても、そう思わざるをえない。それじゃあやっぱり子どもに伝わらないのは当然なんだろうな。

（田）

幼児の教育

第九十五巻　第三号
（一九九六年三月号）
定価四五〇円（本体四三七円）

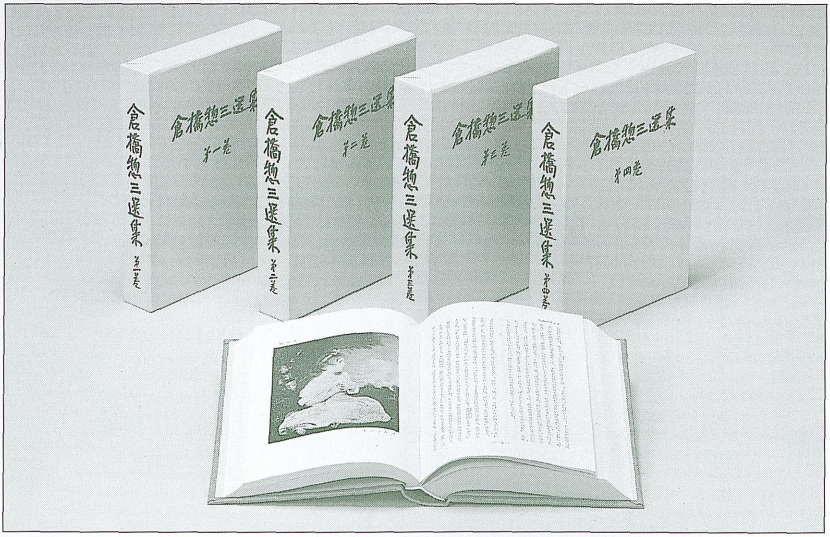
発行　平成八年三月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112 東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108 東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113 東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

倉橋惣三選集

上製本各巻ケース付き　1〜4巻　B6判　416〜472頁



わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・随筆などを集大成した定本です。今でも保育界においては読まれ、語り継がれて保育者にとっては座右の書。

①幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル	定価3,000円(本体2,913円)
②幼稚園雑草	定価3,000円(本体2,913円)
③育ての心・就学前の教育他	定価3,000円(本体2,913円)
④保育案他	定価3,000円(本体2,913円)

第5巻は、平成8年3月出版予定

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

あなたの園ライフをサポートする月刊保育雑誌

保育専科

HOIKU SENKA

特色① 幼児教育・保育の理論、実践、技術から教養記事までをカバーする保育総合誌。

特色② 若い、そして若い心をもった保育者向けのワイドでカラフルな誌面展開。

特色③ いま現場でもっとも必要とされる理論、実践記事をわかりやすく解説。

特色④ すぐに役立つ技術・資料・アイデアを満載。

特色⑤ 楽しく、おもしろく、新たな発見がいっぱいの教養記事もたっぷり。

AB判／96頁（カラー16頁）
付録つき（B6判・40頁）

定価600円（本体583円）

4月号ラインアップ

●特集
入園・進級時の保育はおもしろい／－小川哲也、浅野ななみ他
新しい保育室に新しい子どもたち、気分一新、ワクワクする4月がやってきます。そんな時期の楽しい保育のためのアドバイスを集めました。

●カラーページ
すぐ役立つアイデアを満載!!
“保育室デザインのアイデア－立花愛子”
“人形シアターのアイデア－荒木文子”
“プレゼント&ラッピングのアイデア”
“クッキングのアイデア－渋谷英理子”
特色ある保育内容の園を取材する“訪園ルポ”

●年間連載
好評／倉橋惣三入門に最適／
“倉橋理論を保育に生かす－荒井　洌”
保育現場からの新鮮レポート／
“実践研究－本吉圓子、八木紘一郎他”
新企画／要領・指針をどう具体的に指導計画に取りこむか
“教育要領・保育指針と指導計画”
とっておきのアイデア集
“特選／今月のアイデア－犬飼聖二他”

●指導計画
0～5歳までの各年齢別構成。月案・実践例等掲載。高杉自子・本吉圓子・諏訪きぬ他指導。4月号は年間計画つき。

●その他、バラエティに富んだ記事群
100人アンケート／子ども発見／図解3歳児（乳児）保育講座／できるまで物語／コラム・お気に入りのもの／ユニーク保育者ルポ／コミック版保育日誌／今月のダイアリー／クリニック子ども編・保育者編／音楽あそび／保育情報／ブックガイド等

毎月付録“保育のアイデア”
- ●付録特集「園に来るのが楽しくなる連続あそび」
- ●作って遊ぶ－ねもといさむ
- ●自然と遊ぶ－神谷明宏・兼松ムツミ他
- ●準備のいらない遊び－山本克彦
- ●行事のアイデア－鈴木みゆき
- ●誕生会のアイデア
- ●カット、レタリング、文例集－楢原美加子・宇田川幸子他

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。